

## 付録①

### 川越いもの歴史年表 (井上 浩編、一九八二年作成)

一四九二(明応一) コロンブス、アメリカ発見。

甘藷、急速に世界的にひろがり始める。

一五九四(文禄三) 明の万暦二十二年、陳振龍、当時アジアでの甘藷作りの先進地だったルソン(フィリピン)より、持ち出し禁止だった甘藷をひそかに閩(福建)に持ち帰る。

一六〇五(慶長十) 那覇の野國總管、閩より甘藷を持ち帰る。

琉球では一九五五(昭和三十年)年、「野國總管甘藷伝来三百五十年記念切手」を発行している。なお沖縄の祖国復帰は一九七二(昭和四十七)年であり、当時は米軍の占領下にあった。

一六一五(元和三) 平戸のイギリス商館長、リチャード・コックス、琉球より入手した藷を栽培。

一六三九(寛永十六) 清の除光啓、『農政全書』を出す。わが国の農書に大きな影響を与える。

一六九七(元禄十) 宮崎安貞、『農業全書』を出す。「薩摩長崎にては琉球芋又赤芋と云ふ

て多くつくると見えたり」とある。

一七二七(享保二) 京都の本草学者、松岡成章の『蕃薯録』成る。京都南方、摂州天王子、和州木津、紀州、参州、肥後長崎などに多く作り、四方に出して売つたとある。

一七三二(享保十七) 西国大飢饉。石見国大森銀山領代官、井戸平左衛門、領内に甘藷栽培を奨める。のち「いも代官」といわれる。

一七三五(享保二十) 青木昆陽、『蕃薯考』を書く。

幕命により、江戸小石川の薬草園で甘藷を試作、一度で成功する。関東での甘藷作りは、これよりまず上総、下総方面で盛んになる。

一七五一(寛延四) 武蔵野台地中央部の南永井(所沢市)の名主、吉田弥右衛門、上総より種いもを買い求めて、さつまいもを試作、成功。近隣にもその栽培を奨めている。

同家地先には「史蹟南永井さつまいも始作地之碑」が建てられている。

寛延四年は川越いもの作り初めの年だった。ところで小川頭道の『塵塚談』によると、当時すでに上総、下総、銚子、岩槻、伊豆大島などが、関東でのさつまいも産地として知られていたとある。

一七八二(天明二) 天明の飢饉はじまる。

武州多摩郡小川村(小平市)の名主、弥次郎、代官の命で甘藷の試作を始めるが、最初はうまくいっていない。同じ武蔵野台地上の畑作

村でも、西の方では甘藷作りが三十年以上も遅れていたことがわかる。

### 一七九三(寛政五)

この頃江戸に焼芋屋現われる。その前はふかしいも屋だけだった。焼芋は江戸っ子の好みにあったとみえ、大変な人気で、たちまち焼芋屋のない町はないほどになった。

「栗」の味にかけた、「八里半」とか、栗よりうまい「十三里」がその看板だった。

### 一八〇四(文化一)

文化文政期(一八〇四く三十)の江戸の焼芋屋は大盛況だった。この頃の『新編武蔵風土記稿』の城村(所沢市)の項には「此辺スヘテ甘藷ヲ種へ、又薪ヲ採テ江戸ニ送り生産ノ資トス」とある。

川越地方は新河岸川の舟運で江戸と直結していたので、甘藷のような重い物の運搬も容易だった。

### 一八一七(文化十四)

この頃より江戸に甘藷問屋ができる。甘藷の流通量が無視できないほど多くなってきた証拠だ。

### 一八一八(文化十五)

江戸の文人、独笑庵立義、『川越松山之記』で、富(三芳町)のさつまいもの味がすばらしいと絶賛している。南永井や上富、中富、下富などの三富は、川越いもの「本場中の本場」だ。

### 一八一九(文政二)

堀兼村(狭山市)のような先発甘藷村にとって、新しい村々が甘藷作りに入ってくることは、高価格維持上、迷惑なことだった。そこで先発の村々が一致して、後発の村々へ苗を渡さないことを決めている。

当時甘藷は先発村にとって「畑方第一の作品」になっていた。

一八三一（天保二） 川越領の甘藷村、二十四か村、他領の村とも結束して江戸の甘藷問の専横排除を訴え出ている。甘藷の自由販売を要求。

一八四一（天保五） 水野忠邦の「天保の改革」はじまる。

この頃の諸国番付の一つ、「天保時代名物競」のドンジリに「川越、薩摩芋」とある。

一八六八（明治一） 明治維新。江戸は東京と変ったが、焼芋屋はますます繁昌。明治期こそ焼芋屋の全盛期だった。

一八八九（明治二十二） 蓮田市の飯野喜四郎、大宮台地の甘藷を鉄道で白河に送ったところ高値で売れた。

川越地方の甘藷も鉄道の発達につれ、従来の東京向け以外に、東北、北陸、北海道方面にまで送られるようになった。

一八九八（明治三十一）大宮台地上の針ヶ谷（浦和市）の山田いち、「八ツ房」種中よりとりわけ肌の鮮紅色ないものを発見、「紅赤」と命名。東京市場で大評判となる。

一九一〇（明治四十三） 川越市今福の赤沢仁兵衛、『実験甘藷栽培法』を出版。従来の単位面積当り収量を二倍以上に引き上げた。

一九一二（大正一） 埼玉県農事試験場、農林省の指示で紅赤の系統選抜に着手。埼玉県、「太白」の系統選抜に着手。

一九一四（大正三） 赤沢仁兵衛、『赤沢式甘藷栽培改良秘伝書』出版。赤沢式は大宮台地

方面にまで普及したが、彼の扱った品種は、赤ヅル、青ヅルの「川越種」だった。「川越種」は焼芋用としてはすぐれていたが、ふかしいにも焼芋にも適していたベニアカには及ばず、大正に入ると川越地方もベニアカ中心になっていった。

一九一五(大正四) 埼玉県「オイラン」の系統選抜に着手。

一九一九(大正八) 「紅赤埼一号」、「太白埼一号」発表。埼玉県下に配布、奨励。

一九二〇(大正九) 「オイラン埼一号」発表。

一九二三(大正十二) 関東大震災。

大正期に入ると東京の焼芋屋は衰えはじめたが、大震災を機に急激に衰退、それとともに川越地方のさつまいも打撃を受ける。

一九三〇(昭和五)

埼玉県試験場入間川園芸部、洪積火山灰土壌地帯の園芸振興のため入間川町(狭山市)に設立される。地域農民の要望にこたえ、川越いもの試験、研究のうえでも大きな成果をあげていく。

一九三一(昭和六)

満州事変起る。  
十五年間もの長い長い戦争時代はじまる。

一九三四(昭和九) 「沖縄百号」発表。戦時下の多収品種として一躍有名になる。

一九三七(昭和十二) 日中全面戦争へ。

「茨城一号」発表。アルコール専用だったが、のち食用としても配給され、まずいものとして有名になる。

一九四一(昭和十六) 太平洋戦争はじまる。

いも類も自由販売禁止される。

一九四二(昭和十七)「農林一号」、「農林二号」発表。

一九四五(昭和二十)敗戦。長かった戦争は終わったが、食糧難と悪性インフレーションが激化、川越地方にもヤミいもを求める買い出し客が押し寄せた。

「高系十四号」発表。

一九四七(昭和二十二)食糧の配給が遅れ続けていた。そんな中でヤミ食糧の購入を拒否し続けていた東京地方裁判所の山口良忠判事は、ついに栄養失調で死亡した。

一九四九(昭和二十四)供出完了後の農家のいも類の自由販売、許可される。

国民、飢餓状態よりようやく脱出する。

一九五〇(昭和二十五)いも類の統制、撤廃される。

川越地方のサツマイモも、量よりふたたび質の時代へと移りだす。

一九五三(昭和二十八)川越市中台の坂本長治氏、頼まれて最初の芋掘り観光客を受け入れる。

一九六二(昭和三十七)県農試入間川支場、ビニールマルチングによる早掘り栽培試験(高系十四号使用)完結、普及活動に入る。

一九六三(昭和三十八)坂本長治氏らの「川越芋掘り観光受入組合」結成される。

一九六七(昭和四十二)芋掘り観光の「初雁受入組合」、「大東受入組合」結成。

一九七五(昭和五十)この頃よりコガネムシ類による甘藷被害が続出、日本経済の高度成長とともに減少し続けていた川越地方のサツマイモ畑はさらに打撃

を受ける。

一九八二（昭和五十七）昭和四十年以来、埼玉県園芸試験場、入間川支場となっていた同場は、同じ火山灰土壌地帯の入間郡鶴ヶ島町に移転、「鶴ヶ島洪積畑支場」となった。

いも類の研究でもユニークで先進的だった同場は、移転を記念して『入間川支場五十年史』を発行した。

【川越いも研究会『川越いもの歴史』（蔵造り資料館、一九八二年、三十三〜三十六ページ）】

# 天保時代名物競

伊勢 稻木紙煙草入	陸上 周下 上會 備北 筑松 奥野 防野 野津 前越 前前 松館 岩宇 桐生 備縮 博厚 國都 生掛 前多 板 前煙 宮 燒上 織昆 半蒲 織蠟 陶帶 鮭草 紙庭 物燭 物布 地布	見後 水野越前	紀薩 美備 山阿 尾薩 陸土 伊州 濃後 城波 張摩 奥佐 熊國 美疊 京藍 瀬上 仙勝 府 西 戸布 臺男 野 濃 陣 物帷 平武 煙 織 染子 袴 鯨草 紙表 物玉 附地 地土	加賀菅笠
伊豆 稚	奥近 尾宿 下播 奥甲 筑常 甲備 州江 州州 州德 州慶 州從 前濃 豊後 津源 海更 鏡姫 南水 博真 黒尾 五科 部 田 之 輕郎 鼠 子路 品多 道 錯 嵩 織 帯 保命 塗鯨 腸麥 縮草 瓶石 絞地 梯酒	大和吉野葛 山前 色稻 荷奉 松書 尾張 宮重 大根 常津 山前 北伊	紀美 越天 下山 安若 尾豐 爲博 伊濃 前和 濃城 醫州 州前 豫多 根岐 雲三 結八 鹿馬 鳴小 拉煉 輪城 島 海倉 山 來阜 橋 膳 利 素木 藥 絞帶ノ 朱鯨 丹麵 綿黒 鐘石 地欄 酒 三伊 奥北 江下 近豊 阿相 木河 松証 山 河勢 前越 戸野 江後 波機 曾内 前戸 城	徳州赤穂
茸	上江 越武 江駿 近肥 殿山 箱奥 近京 下 州戸 前州 戸河 江後 河城 根州 江都 越 吉龜 生大 佃木 鳥八 興竹 湯南 赤總 利 井の 森地 井代 人元 牛根 火の 櫻の 蠟白 漆赤 櫛細 細細 贈ノ 打 び し 塗 赤 櫛 細 細 贈ノ 録規 鱈 魚物 玉柑 綱工 工駒 淡燒 鯉	元進勸 京江 紅戸 鹿子 紫	武遠 駿東 山相 駿駿 伊遠 神江 遠伊 武駿 藏州 河瀬 城機 波河 豆州 川川 戸江 勢藏 河 鶴日 安燒 壬小 虎山 熱相 龜脚 白ひ 隅小 見坂 部餅 田 生原 屋川 海 甲前 須 田吉 のわ の の の 良せ 良せ 白と 川 らの の の の 良せ 良せ 白と 川 梨び りん 焼 梅 べんば べんば 子餅 栗餅 葉干 頭酒 皮布 いとしき 餅漬	幸十四
川谷武中武下東上筑下京駿安越甲大	越中 越道 越野 郡野 後越 郡河 房後 後和 薩せ 大燒 三日 鹽赤 柳中 八字 米ぜ 葡釣 米河 光瀨 城川 山ッ 津良 良ん 月瓶 摩う 深の 島が む和 にん 十の 子の 芋が 桃米 漬し 頭酒 紙く い子物 い零餅			

林英夫・芳賀登編『番付集成』下巻（柏書房、昭和48年）所収。最下段の左端に「川越 薩摩芋」とある。